古今栄雅抄 一 春上

十六冊内

古今和歌集卷第一

春歌上

あらたまの年たちかへる朝よめる　在原ゝ行平

年内に春はきにけりひとせをこそとやいはんとてとやいはんとてよめる

一ゝ年の内に春はきにけりいざとしをこそとやいはんとてとやいはんとてよめる

この歌ゝ古今集にはなし

當集乃巻頭四首は紀貫之

はるたちける日よめる　紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たちけふの風やとけらん

友むすび　水の行ちく泳ぎ人が　[illegible]
とくるとしの月　今こそ立春日　栗風解し漢
朗詠の池　漢東郭風　廣解　[illegible]
ひちくちひくてたり　潢字也　河南葉よりあり
後撰よもくたり　拾遺ふり　[illegible]
とて　後成　[illegible]
影ゝすゝ　誠よちゝ　[illegible]
後撰よい　[illegible]
よみひとゝ　[illegible]
高位乃人　[illegible]
ちさん　當集いばき　[illegible]
影一雁も

[illegible]

[illegible]
霞乃立たるそいづくぞ　吉野山よい雪の降る　[illegible]
[illegible]
[illegible]
三吉野乃　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二条后の妻乃はし　光の清くこ
中納言長谷女也　清和后陽成院の母后

雪のうちは蕗はうぶくり萱乃水をろかみそこと
あゆゝ乃雪をぬまぐ流ぬふ因教をまはなれだ流
乃水雪をとぐゝまて五つ萱をぬ乃いをのが附ま
生く花ふ水ぐゝふんもつさて渡乃水もうけねんと
ふわつを萱乃こゆまろをみぐ流くあまど雪といふて
くりて渡とつひなくぶのまぐ水とうをとろべき也

影ゝら秀

梅うえはさふ新萱けるかをてをけをもいまこ言いありつゝ
まふなりて梅ゝえを萱ハ来居くををども狂ふものの
屋ゝに雪はあゝと也ちろかをてとゆまをちりて幽極乃
ちゝ紀をゝ谷をハまゝりをてといふ面ゝゝ水ゝ偽るあの
器乃欲の中ゝ梅ゝえ乃ゝ也

雪乃来るゆりかゝれゝをとある
素性を遍昭俗の附の息ゆり法師乃ゝをみ屋ゝ。
法師を萱ゝ生家をゝ皆ゝりしとゝふゝ物撰るとふゝ
ゝゝゝゝもゝ

素性法師　古今集六二男

まゝゝゝゝもとやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
萱乃なくと也みゝゝむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うれをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

七首目

題しらず　　　　読人しらず

こゝろざしふかく染てしおりければきえあへぬ雪の花とみゆらん

ある人のいはく、おほきおほいまうちぎみの哥なり

花にみんと深染(ふかぞめ)に染(そめ)ておりければ、きえやらぬ雪の花とみる心なるべし。居(をり)たれぬと一説(せつ)折(をり)たれぬとて下句の心きこえずに成しかば物おもひおもはしともいふれおれば、さもあるべし。此哥は居乃詞うきしれおりたれば面白き体(てい)當時(たうじ)詠しりしものゝ歌のおくにしるす人のおさ乃おほきおほいまうちきみのうしあるは忠(ちう)仁(じん)公(こう)のことなり。白河の太政太臣とも云。此代は前官(せんくわん)をおとゞといふ。是はお官にあらず。此忠仁公照宣(せうせん)公のは前後に太政(だいじやう)

太臣と申し、仍忠仁公を前とし昭宣公を後と号(がう)す。おほきおほいまうちきみとは太政大臣乃やまとことば也。此集(しふ)にかくれなき人の名をば歌のおくに注(ちう)し、又何まことありて識(しき)ようちぞりしき残志るせるなり。あざやかに万葉に何の歌どもをかやうにしるせる也

二条乃きさきの東宮乃みやすん所と申ける時、正月三日おまへにめしておほせ言あるあひだに、日はてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける

清和(せいわ)東宮(とうぐう)乃御時也。二条后(きさき)御息所(みやすどころ)乃と紀康秀(やすひで)めしておほせ事あるあひだに。日はてりながらゆきさ乃かしらにふりかゝりけるをよませ給てへ　わたもありたれぬ読(よみ)[illegible]

菊ぞ咲きてい。石女佛ちどいつまりあ。されど成月の
と号する迦年儀を更衣ちり。見い佛衣をぬぎかへ
給ふ。雪ちりと云ん迦佛位乃後も。あ新さ毎よ。石女
佛のあふ佛息ぬとて何まさあり

菊乃日の光ちふあるる紙なれとかしらの雪とちるそまひき
東文乃佛めぐこふあへる我なれどかしらの雪とちる
ぐまひ。花とめぐいまあ新こ雪を。光て白髪よとそん
てしある迦ひ。花を代掛ぐべうん

雪乃ありくるをとしある　紀貫之

雪ちこうめもはる花雪あれをなる紀雪も花そちり雪

雪乃あちて。菊の雪あれで。菊のちる紀雪もだられの
ちりとなりぬあの菊乃めぐを出るをば。本間萠といふ
ぬのめを雪のとりひちる迦。雪とりそん梅よりひう
あたり

雪乃ちり　紀ふ友ある　藤原ちとる紙　言直

雪やと紀ちやをそをきとこさそ。ちそん。雪ぐふもなりぐもちるふ
はるのとく立ちるりぬ。花のをそくさくりとあぐはる郷
さふぬ。雪ぬ。雪ちよなりて。菊のをそくさ紀あると
ぬそ。ちそん。ちあ乃ぬうぐひまを。鳴ぐあると迦ちふよ
ちりちそれど。雪をちるぐ。花もいまぐ。はるぬ。待ぐ
ほんちり。雪乃ちりぬ。日数ちそちるべられど。雪の

とゝもぢの色紅葉するあらしのみ
かやうなるもくるしむものいみしきなり

春乃はつ花のうた

壬生忠岑　和泉大将定國乃子

まつさきねと人もいへとも當のうぬり紅りいあらしとそ思ふ
たちさきねとそ人もいへとも當乃鳴ぬ程ハ
春よハたのしとと思ふといへ新ぬれもうぐひすを祈
波ふりさくいつるぶたちるも紅事也

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春風ふきとろ波れひまとふ新ぬるもみやまるふ乃紅ぬる
春ぬぬよとろ水のひろ乃くちいつる波をまつむ

小くあつかも也波やとうふまて花とこゝ山也　春
風ハ紫風ゆり毛待乃程よあり

紅とも也ゆり　紅大納言朱雀とも

花乃春を風のたゝりふゆくて花當ふそ春ハ
ゆるゆの春紅ぬぬの春ゆりふりへくうくひとを春ゆり
出ゆとぬさそふ春ゆる色よ風ゆる也梅ゆる白ふよ當紅春
春ゆそふぬとそそーとゆふーゆり花乃春の風ゆり
ゆるぬひくく白ひ梅ゆぬ風乃春ゆりとゆふ當ふそふハ
いぬるふゆりゆ人をゆそふゆぬるふよ春ゆ春ゆて
うとゆゆうゆ加字也又とゆるふうゆり

當乃春ゆり出ゆ春ゆるくい春ゆうとを春ゆれゆ春ゆまゆ

大江千里　泰演寄人男

菅乃谷よりいばらの花あり　花のくろきもあれば白きもあり

これらの花をもろべさと也

山原樣深　業平男之方父

花あてと花も白ゐね山さとのうゝねようこひしきの唱

けるこそどもをもるかゝゐね山里ハ物うぎふ菅乃谷くと也

どのうゝいう紀とのつんをうりあるこもあり物こまれ

ともえん也いばをこうれとのんようゝり。俳字を

ゝあるこもをもを樣深勅撰あゝ丹後国国原とい

山ごとふ綱谷ゝくゝあること也

新ゝゝす

聖人ちゝ家居ゝせれを菅氏唱ゝあるこあをあまれくゝけく

の爲ちゝき家ごをこれをゝうゝひをの居をゝ物ごとふ唱

とゝろこびあゝ也ばを聖ちをこそ聖をちゝと也。あゝ居こ

ゝいゝ屋をもあゝをちゝり。あをふ接ゝふとゝ宅家とわく

ばををふくゝを物ゝなり

芋日聖ハ芋ハをゝをこそ芋のつをもをれり我も羅れり

芋ハをゝをこそ。ばを野を屋ゝ芋のあをゝ野樣乃人ゝ。芋日聖ハ

ゝろ芋ハをゝ我もあをれりとゝゝこゝ也。

ゝろ芋乃つをもとハ芋のゝりえゝづゝちゝ紀をゝゝあれを

ゝりて。人のばをふをゝ若樣乃つをもとばゝをこ

つをゝ紀和ゝ寸式ゝ。素をばをゝろ芋をとゝふをゝれをこ乃

芋乃ばをゝハ。かをゝを物れあ　ひをゝの山ひをゝこ乃ゝをとゝ

ゝ紀ゝ。ゝ男ををばをゝ芋のばをゝをもゝ也屋

をゝゝゝゝ紀ゝ。俳物ゝハ。むをゝ聖ゝ高

集りは。素盞嗚尊とたりなるとんぬべし。或説に。素盞嗚
尊。武蔵國国司乃養をはたらりそこをむさし野とつくり
書もそ文書あるよりろ欲おかり
万葉法人まろくさもひめ書あるひまきあり山の名
和名抄ハ武蔵ハ国てまつまろ紀福やのうゑいつをを
あさいもをもうん人を国てまつまくふ新を野人のまろふはたん宝
みゆよハ松乃雪くふさえをあさをあさて野べよ
海山よハ雲の雪くにさえぬくり新を野人とんぬ
まろふはたむとを地蓋山乃雪いたをを脚踏の奥とんふ
和漢乃流例をり詩よ淡山松雪屋人とつ説
本あまども。松の雪いきくよ紀をり
かををりくとふ史乃野雪出くんよ今いくうをてまろふつをん
燈史の野雪出くんよとつくうありてをれはをむべき

ぞとも地。素盞嗚尊ハ燈史野とつよありそのの野ををまりの
をのを野雪をとつよ。一説。素盞嗚大神。あの所ハ紀伊
乃をもぐめ。燈史をあまをて瑞籬をあくつ結あれハ燈
史野とつよ。これを素盞の縁紀よ分明よありとつや。
昔天智天皇。鏡前王よ燈史をてらまたるとつ行り。
國史よ。大和王素盞嗚尊ハ燈史をあまをて平城よ遷とと
説せり。実王周嵩を燈史ををつまりしハ。魔物を
いふ義女乃くく第乃義よ。
軍ををこをりまりあるに燈史をあつふ乃乃人御乃
まりとて軍無きをくをくとつ乃をり。國史よ素盞
野をよ燈史をあまをて。平城よ遷とと海せれど。素盞の
ことをくをくを山とつくう燈史をあくべれ野をりて

あまをぶね緑記乃流矣之ろべ
梓うをとして春毎ろふまりぬあもとさへふろふまつこてん
春毎乃雪ふまりてさろりと　まろあもとさへ降ろれぎろは。
ぬれくわろをとぼとてんとゆ弓をぎぬをとくろれば
あづさゆをとくく春毎とはぎあたり雪ふあづさろ
ろとばろりとあろふ文字をろひぎをとてとろみ
いまあろ迎さへを離子ろまりぬさろと云さへ
仁和乃みとろこふあろ海よ人よりふ
あまろひろろ海手
仁和ろ光孝天皇ろりぬ小松乃みとくとろやふろ
みどをと年号をつまをまろぬ春のひろろ人のぬ
まろろりろ数乃十よろうろと紀貫とつまあ春。

春乃ろぢめはろこぬみ春をつこてあををたろりこ
ていろふまろりぬふろのもぬ貫せさ野結ふはの海お
ろりぬ古代ろ賀ぬぬろふ北海でろろねどもあろ
なろとぬまぬ海氏のみ春の春ふろり自沙はあろ
まろり
春乃為春毎ふ出くろふはむ我衣ろふ雪ふ降つ
さこがろあなれぬあろろもろふ雪のあろ我春の
ぬてぬろれ春ふ出てみ春はむとの海あろぬ
乃あさろぬろりぬろり。衣袖とも書。ぬ海ろみんを
あろく孫勝乃庄源迎
欲あてまりはと仰ろれはぬみくをれろ
南集撰ぜろるとと紀欲我ぬをまぬ仰をもぬ海ぬ図

法こう師紀

かきたりけるこの業つとめやゐ白拍の神ありきへて人のゆくらん
聖のまうかたをぬあまこと乃人はたろうの神をとうり
てゐをゐと迦白拍いたろきをたゑこう詞迦ありきへ人
こく折きへておるゐ詞迦たまこの人のゐうかたをよ
白りこもちゐこもりて神うちふりてといふんあるがち
きらぐりぐ神楯延とこく源氏よいとふきへてのひ結
ふ命のたこくとあり又拍こてのまいぐても結ゐ
なる紙ぐこりきへさ勢たまこうぐ詞を源氏乃者。
こうこうやこまぐきりん乃とて小山へおとせ一時ばかの上
を乃こう乃んてうぐの花ちよこくこのこまひてこ乃に
惟光と使よ乃りきひ一時うもぐきこいこる詞こゆく

てハたいぐきりきりきへこぐとりこんよきこ
ぐこく詞乃んこうる迦

東京行平物語

東乃きこう寄の夜ねこきをとうもこ山風よこうみこうるこれ
はこうれこうふぐこんこん乃きこうものねこれうもこ紀ふこうく。
山風よみぐこうと迦ぐんぐ海こう海ぐれやこここんこり。
かきこんん乃夜とハ海の夜こもちこうるを夜こよあこへたう
ぐこの夜とこうをこんかれ紙布をこふきこてねこあり。
ねここうこうこ紀ぐこうこ物迦ぐ海乃夜もぐこ乃紙布
こきこぐここへてねここうもこ宗れぐこ山風よみぐこくこいこう
経緯とこく宗迦海こうこうれ今海ぐこくこに
寛二年乃伊付きこいこ乃夜の方合ふこあこ

千合といふまつ。寛平年の御時よりそめまろうそ。昔
の今合八幡男女方を分て。そこ方人の中より御の今
ようをとりそろへて。歌を詠じ。さ。歌はをひて。絵書
うる歌くしめその日ふいうりて。講師あれをよん
あぐるを。たちよきて。傍員の座をあきらめて
傍員をつくる也。を侍式部こ乃風流を。洲濱を
つくりぽ本をとうへ。金銀をとりて花をもをりてあの
花鬘をとふ。歌をとくく事もあり。如法大経也。白河院
までは。ありぞ後も絵とり

源むのゆきの物語

とあるたのみとりも書くなと一なりの色をうり
書乃名をとりもれば。書きて。ひとりかまさうと侍り

欲をてまつれと侍るれ。時よりんてをれり

はちう物記

我せこう衣をうるさあ物記こと。ふ聖人のみとりそ色をうり書
名をぐれ。聖人の書乃名ぐこにあひく緑の
名をはるとも也。をふさわといいんとて。我背ぶう衣
はるとつぎを。をりおろを乃ろを乃緑の色あきを也。
わぐせこう衣をうるさあとう衣をぐ。女のをう和なれぐく
はちぐ物ありぽせこる。丈をを。丈書にをうるは手い丈を
いありぽはまといいまも丈書よかうりていうがご
と

我せこを初小屋りて。おうる風乃籬の酒乃まうそ。
わせこうをうれ乃弱も沼よあきて書れを。紀伊乃れ

わかせこに見せんと思ひし梅乃花それともみえす雪のふれゝハ
青柳乃いとよりかくる春しもそみたれて花のほころひにける
あをやきの糸よりかけてみとりにて比乃春そ花乃紐と緑
ひぬると也いとのみたるゝといふはつよそむものかくろふゝ
といふ青柳をあをやき柳といふへきを中略したる也
春しりそハ春そなり

西大寺乃ほとりの柳をよめる　にしのおほてらとよむ

僧正遍昭　大納言安世八男　良岑宗貞入道

浅みとりいとよりかけてしら露を玉にもぬける春乃柳か
はる乃柳ハ緑(みどり)の糸(いと)をよらせてしら露を玉にはさるゝ
ねさかるあたると也玉をさし糸にてぬく物なれハ
しら露を玉といひなしたる也あさみとりハうすみとりなるに

みとり乃柳の色也柳色ハ柳の色なり詩に青糸(せいしゝ)縷出(いだす)
隋門(ずいもんの)柳なとあり此歌乃体(てい)を代緑なといふへしに

題しらす　　よみ人しらす

もゝちとりさえつる春ハ物ことにあらたまれとも我そふり行
百千鳥さへつる春ハさまさまのことあらたまれとも我身
そふりゆくと也ふりゆくといふハ年よりゆくとあらはしたる詞
白し百千鳥ハ鶯といふ又春さきにおほくの鳥の来り囀(さへづる)
をもいふ古説也後拾遺集にたえてさえつる鶯の
乃百千鳥のこゑきくなれは春すきやハあらんねとの一首古今集
いつれも鶯の事なるへし柳をとへてそへみるもおほかたは
只鶯をも百千鳥といひ多(おほく)の鳥をも百千鳥といふとんハ
えてありなん宗祇にハ鶯にあらすとも一定(ちやう)なるへし

又堂にくぐろべくしぶりちぶりもひとつせん堂先百も
柳樹とのぞくぶくしもとりつり
あやめどの桜乃実むきもむ百子ゑるとりくれとも赤さ浅き
はさくぶ堂ち桜の実ハむきもむまぶくれをありくのゑと
まさこ和
をちこちの方つさもちくねゆにおほつゑくもとふこゑれ
ををのたりもちくねゆるふ雅ともなく呼子ゑれ色
ちるとこさひゑ色りたゑ初也ゆいさもちくねゆとも
仮をくくぬとりぶよふぶこゑ浅くおほ一只とふこゑ
とりふゑ乃まちおてこそあくあ何ゑとちりて実ん
をこりふとりまぶれば拾ゑれまも也ゆ偽ありともかく
ちくちえてありちゑんぶこゑとりふぶばゑりちくゑぶ人

を呼よ仮くりぶ実説嚔子ゑるとりふ
ひとおそ乃ゑまもあくん我妹ふゑ立別ゆんたつさ好と
古畑乃そのゆつさふおゑ嬢乃ゑよふゑのすそ紀ゆくれ
ちくつぶちくくもとも八たりちくもなり西行ゑ
ちぶこ手也 係 端日
乃ゑ乃ゑをゆそてちくゆりくゑ人をちひて強る
九汀内初恒
まくれも乃ゑくる也ちくゆのみちゆさゑりふことやつてま
乃ゑ乃ゑるに白雲ゑれみちゆ紀ゑれよ城へいさたゑ人
の衣くさよぶとつくぶんと也蘇我ゑ乃ゑ書と後紀
とくぶ乃の使よふ西へ行人よこと偽せんといふ乃
ゆさゑりとハ乃和恒ゑんたいでのんゑり乃行船と

書ふりあれぬ書面なり紙筆紙中紙後をこ
越とかく
玉かつらの花の香りふるさと姫はとあひてちかつ比かふ
伊勢物語 藤原敏行女 七条后女房
あるあり門をかなとたてゝ行ふを花をたゝ行ふをかくてこの方をもとめ山の美家なとをとかなく
ひとをとゝ行ふを花さうねさとふをとこをこゝかとも
ちかつ人〳〵
打ちまこと袖こそ自人梅の花ありとやとふ学なく
一枝をうちたる我袖のあるとやとふ
うくひすのなくとも
をしりも名こそあれとあり極を袖あれ宵れ梅を

紅梅書いたるもなれどとりまぜ書ハ和あれよあぐ
ゆれでもあれをたゞ袖ふれ宵の梅ぞとも也ゆそれとハ
梅をとゝ也懸字の梅あり。但懸大度万株梅
ちなどゝ云あそれふるをそこりちをとゝ
漢仙記云銀袖白移木花古情茂と云漢武帝の
石紅云の袖の名梅花ようつく白しをとゝめを
つとゝいとりおりか極れのこと紫今を袖ぞとべうぞ
とあり
宵ちく梅花うへ〳〵あちさなく袖人の名ふあやまれそり
やどちく梅花うへをとゝかしるく袖人の袖の名ふあ
まこそこと梅ようくむふ〜なり。あぢさなくを
ひるくのんなり。今をあぢさなくの袖袖ぞとべうん

梅花をもちよりてかりしとり人のとりもむ香ふかきかな

たるれかまぶ梅ちるなどありしふ人のあれをと

どめむとりよ梅が香の神ようたりあるとも

梅花をおりてよめる

うぐひすの笠よわしてふ梅乃花をりてかざしん花ちるやと

嘗乃笠よわしてふ梅のむをおりてかざしむ花ちるく

のちるやとも花を像る樂よ梅をうぐ系よりて

うぐひすのねをてふさい梅乃花ゲさといふ歌をかま

てよりて花の笠を笠に似せて嘗や笠よわしてこ

ふ〳〵んどおりひらてへたり笠をだわしあるなれど梅

うゆをしく梅乃花笠をねの野あるる

素性法師

しるそふのこあるれとそ乃 梅むあるねを書へおりてありけり

よ我ふ梅ちるく見〳〵うゑ乃ねを書そたりて

狩まさ所とも

梅をとりく人をよをくりまる

ちるもおりり 或本にありとも

春ちるて雅ちる乃せん梅むをもむをもを書ゑをもちる人そちる

梅ゑをもを書をもちる人をでいたるねを書ゑ外

よはをれるる乃きくさとも乃ん紙ちるねを人よ物紙

乃ちるをかひる紙りの乃ありの

くふ山よくよあ新

はるる梅てさ

梅花白ふまへいくらは山屋ふこれとちるくそあり書

梅乃かをりに春べハくらき山城なれと。春べは
かくれなくしてあらはなり。梅のにほひを蔽じてなり。
暗部(くらぶ)山城濁(にごり)てよむ也。山城乃名所なり。山名溝べな
どいふやうなるは山名にむかへたれ。春の海べに住(すま)
古(ふ)ゐのちる陰なといふを文字を略したる也。但万葉ニハ
春部(べ)。春敝(べ)とも書たり。古(ふ)集の字。本字ハおほく
かくねまおかりの哉
昔おくるさ(のらい)の河原乃青柳ハとも春部ともかはらぬか
春敝(べ)さく萩のうへのやまとさはる春そなにおもひそ喜
児(に)等(ろ)くしくのんなりろとをと同れ。春部乃事也人庭(てい)
誹(はい)く催(これ)之人のんにしさぶふ風さとや
月夜にハ梅花をおりてと人のいひければおるとて読る

三一〇
月夜にハそれとも見えず梅花香を尋てぞ志るべかりける
歌のぶこゝろ。物ハかく暗シ。月夜にハそれとも梅花乃見分がたべ
きに紙みえねどもかをりを尋てしるべきといへんとぞ
まや。白梅(はくばい)なることを見分がたきといふなり
春の夜梅花をよめる
はるの夜乃やみハあやなし梅花色こそ見えね香やハかくるゝ
春乃夜の闇ハくらきしをあやのなきとなりあせるに
とて香をかくすといへども。あやなしとハわけもなきことをいふ
ことわりなどあちきなくといふ意なり。又あやなき
しといふもおなじ。此乃事也。あやなくなやなどめ
くらさん。何のあやもなくてはいづれなどいふおなじ

玄蕃寮、玄公、いばれ、あやちまろ、とうむ、又、めやは、あやは、
くとうは、相模、あひまく、といふ、ゐなりぐくの子を畧した
ふなり

拾遺 ものふ色てあやなく花をおしむらんいろいろの浪の言もこそあれ

同 白ひをも風はそふとも梅花さそふ人あやまちつゝふもちゝとされ

後 ゐなりてそろかはあやふ梅むすぶ人もう郎

同 これもとりあやは玄蕃寮、くとうは、二村山もちゝとゐなりゆき

あやちまはぢやちまーのちりーを畧てあやまはあやうくとゝ

ぢひろくのんゐりぐくの子を略きとる也

和漢朗詠 ゐうはるとふ屋とうろう人の家はくく

屋とうてなとへてはよいとれうまれたうの家のある

ーかくさうふちゐん屋とうちあるといひ初て作り

あれもぢこふあめとうあ新梅むをおりてよめる

貞

ほゝ梅ささ

人をいさんをもゝとも古只花そむーの香ふ白ひろう

貫之 ぐいぐ父父轉ゲ。初瀬観音乃中ゐなれぢつのよ

まうばろ宿乃あるじのひさーくをとづまねとく。

うゝむふとぢこゐろ梅をおるく。花ぞむーの香ふ

ゐりふと我山中をとられはあゝーいゐる。玄梅乃今

なりぢつさまぢ不知とりまりぢ人ちゝぢぢいもちゝ家

とはぢいでゐ屋ぢさあれをいるとゐ否字なとのんゐ

否字ハ玄字乃ちゝろ

水乃なりゐ梅むさゝろまる我よめる

伊勢 孫承徳門法女七条后女房

芸こと ふるさとの河ぶちを とりて おくまきぬるの小神やぬまるん
はつぎと ふなぐ河くに川ようつりたる花を とりてくぐるに
をられぬるあれど神やぬまるんとなり
手紙にて花乃かつとなるれいちりかるをやくもるとこたん
うぐみたぎあるくなれどくるれなれどこれをとーを
面くぐ花乃うぐんとるほみる花乃ちりくふぱくりる
まてあるとも迎ふまは面なぐくむとぞうりあれ
どこ祭り紀よ。梅とあまだ梅づりてよりあり
家よあり まる梅花乃ちりまるをよある
はるゆ紀
くるとあくとめられぬ物紙梅むるの人まふうるひぬるむ
こ影くとあくると月もるまだ乃るるれこの人れ見ね

まふうはるひぬるぐとも。晩間と半。められぬるの小
月もるれぬるや。月不離とくく。蕨れとしるをこの人の
中乃面るをるをぐるとしふうつ紙みるこちるしあるぐ
ぐこのつりくぐちりかくふちるをしふ裏こを。ぐ千れこ
とぐ紀よ。梅花のちりまる紙とあまをぐられるうつ
ろひくぐつちるとくる面

寛平れ汚付きたいのるやの歌合乃うち
ちん人まくるを

梅くくと神ようはるくとあていまるすくるもかくこなくるゆ
手紙そでふうつとぐ紙あくぐぐるまるるるもの
白ひがかるれまくあるべきと迎

うせいかうし

ちるとみるくこゝろの色さ紙梅むうて白しゝい神ふと海まろ
ちるむろのおしさみくこふくけるべき梅をうてそ紀白しの
そでふとまりて梅ちるとの紙んをうていうて
なり梅と書てとたとみる色をうてるるをどいつをのま
まふるるとこんこゝぱこ方ハうてそきところろなり。
あゞ一首ありとつふ
ちるんてをんとをれハ如良むうてきさ海乃ゝふてそ色れ
ふうるうてふくまれ深ぎこゝぱうつろふまもおしうう海や
うてハ梅を愛ちうてそ紀まをあまりよなどいふハを
ふしてふこゝろよりう
影ちうう影
ちうんひとゝ羅に
ちうわとも書をたよのこゝ梅むを色しさ時のこゝひ出うゝ世ハ

ちるをそ色えとぶめぬるうひなれぶせあて者ぶふよこ
せ言しきと紀おりひ出つきとちう
人の家ようう色ちうまろうきこうう乃花さ紀こうめ
ありうる紙乃てよろう
清ちゆう
言紀ろむう梅むちうといふまいはうふうう
言紀ろむう梅ちうとつふまいはうふうう
影ちうと
心ちうとこ人もすきえぬ梅むうてうるひそ紙んこうやちむ
又ち里ちをこ人もちきあぬふきこう
言はいはこ乃屋まれも紙も人の為ふぶ梅きび
ちぶこゝろ人ちうまんぶちうびそ紙んてりてこや

さんとぞ。をぐらあるを。ときあはせ不和なりぞと
ちむさぶらるんを。世俗いふはうなりぞ。を程と書
てぞをぞさうんとぞもむぞいふくぞ。ぞるとびうと後
ぞ。この乃右のぞをぞ。こいぞ。実説あまびぞてぐこ
をてかまり。歯葉乃歌あまこ不ありぞいばれも芝よ
おれ。しぞこ。ハ猿丸大夫家集よ。ぞるふゆりまるに
むさぶるとり。まるぞ乃んこくとぞ行り
拾おつれとも弱ををきあぬあやめ多ありるも人のこねるひま
後拾 者をとあてうゝ人あるをこのやあまあやく弱のをきあさりまり
その弱もすきあぬ芝とるふたてる汀のあやめそふやひさうる
いつれを弱乃らあぬをぞをきあぬといふぞふりをきぞむい芝し
ぞ猫ぞうぞんをぞれをまぞ。ぞるふをたちうゝたく

ぞくゝをぞんをうるれゝも。ぞ乃うゝたをあやよく
ぞう猫のを

うゝんとよくゝ后乃あまゝよなあまゝのををさ
せたまゝるをぞんをくゝよある

藤殿乃后を文徳の后清和母后昌泰三年正月
一日崩七十二大皇太后宮忠仁公清姫忠仁公摂政太政大臣

前太政大臣

年あれをゝらひを元ぬをゝ乃ハあまをとをゝ乃れを物ありひりる
かゝんをさせゝ猫を后の宮新羅をるをゝ父自をのあ
まりに。ゝをくあまをどぞんれを物ありひなゝをとをふをそへ
てをあり。ぞゝ宮をのもゝ乃ゝ
まあゝハをゝ。ゝさゝ也

法乃ゐんうくはをんくよめる
清院ハ淀河の乃もとに天河の乃をわたりて惟喬親王乃御
山ざくらり。河内交野まふあり
世中にあえてさくらのなかりせはをのとをうらまし
ひさかたの都と不都とのこゝ川のんもり都乃ゐんハ中くらくハ
ようくんとゆふ不都をさ者位あくどのちろたりて不都
乃ゐんをもゆ枝おりゐん枝まされろうや。伊勢ろ者ア
ちれどころいとく梅さ先てくれろて世中をてのうくれハ
ど花一の色うふあれど業平ぞくのちるを枕草
ちくれどとゆくたり
歌ちくり
ようんひとくー歌と
花さくらもたをりてもあんゐねんけるあ
ゐくたろ岩乃ろうおつろ滝を色ごくもの有ばハ
滝ろくもがふをれて乃ゐ人よ乃多たくの春
山乃さくらを乃ゐくよめる
うせいほうし
みくれなゐや人よくくん梅むをとふをりていんけとふせん
人よくろどろハあるろふあるべくれむををまごとふ
をろくおけとふせんとゆいづとハ古墓世俗よくや
おとゆふまを乃春ふよ異と書ばくみくろ物なれ
でいろり山ばと演ばと物のはとなどそれ物とゆふ
花さくろよ京をとんやりてよめる
乃ろくせて柳さくをとあれなませて物をせれくー花ろり書
柳を緑ゐ花ハくれるあふ咲まくつとて乃ゐれで物ぞ

ちるれ紅葉を織りまぜてぬぎすてし柳さくら
ちるさまぎ紛てる。混乱たる地。撹雑とかく。やるれ梅は
ちるさ海ぶつまろをぬぎ紅まぜてとりつぶくもなるれど
蓋くてかれぬこころさ海せあるやうまある地。美しき院
沛息所乃歌合よ　みあ紅あれ美目の聖人のさくら
ちれえころかれよ匂ふ
と紙ちさ海ぶろとしあり
さくらのちるみてものあわるまを歌てよある
きのとをより
ちを考もあれ　芳ふさくらめとをあるうへ人をあるたまろ
ちハ美ぶとふちれもつよちろれぶ考をあめぶ芳ふ
さ見てあれどをまあれ人のゆくてびるれよゆるまへ

たくぶくたまるとちるぶ紅ある地ぶ。むといそ
ぶを考りとひさくめとるぶ紅ふ
河ふ松ぶ
をれるさくをとあふ
清ゆ紅
をれるもあてれつる美麗たちくらん山乃さくら
山乃さくをぶれるもあてをりはる麗のたちる
くぶをみえまぶ紅をも地ぶれるもいあれる
ぶりぶを河乃あもるはけるりたまるとあてをりはる
どいるんとるふ文をくるまれぶ雅もとふ
牧をくをぶを紅くんてぶれるといふ然とふ
仮を僻まなりある紅歌をいぶいるぶる文を

とそ[illegible]なくて。雅[illegible]ちとそ[illegible]いとべきなり
むると擧くともむると云覽なり
よるべくふるたちまちふるとやあさ海さしたくなる[illegible]
りくるやいりをとゝ羽なり古歌の詞也
歌をそてまつまと作られ　はふよみて色てまつ
桜色さしたるとも所ひさの山のひとりかの白雲
はくるのさしたまりぬ山のひとりちるとのみ桜る
なりとぞちりもなくさらやふいひくぐたる雲
あしびきの山ぐくるのそらひつくるとだるりんは
色ぬ雲家に寄動よ。蓮ぬを。清てよむ。ある。
あぐ濁くよ。と。一説清水流也。ひを使字なり。
乃あひなり

實に水清けきたいのくやの歌合のうち
山ぶきを乃つ
みよしの山色よさまろ桜色ものそあやまれろ
山ぶきよそのたろくの桜ろが。雪とはやまろくを
色ぬひようろ月ろまろ[illegible]ろ
泉字をとうふとよむ。国字也あやまれると沙汰あり
伊勢
さそくむまくろれろをふを人のくりあれやはせ
桜色とうんいぶくまのくりてあるとうだまを
人のんよあるれねそ。あるれとをくへあるを。寄動に
ぶち儀平動長者。あ。あ。待やはをるを。桜せらを
くるとと儀色をいひくるとあるとを。をあをられ。咲ふ

くるしも蓋門のなど柳のさゝ〻むけさきやう
よあらんぢぬしあはさてゝ
てさゝてゝんよ蓋のくゝさ多ぶと人よあれを
むしひくいそん柳よとゝへある何なれぢあれやハせ
ねこうかるしく伯れひさゝもとゝぢのをさ柳と
ぢれ まふんえて おあるやをせぬハいそれどのくやや
きもろとこういそあとゝるゝ爰ふ殺塚乃まちる
かやうのまをどくちろえまくべとゝり何づい
おれぢきこと
ちとるゝハ思たとやいひそぬるそ世中のまたさる
ありそたといひたてゝうとゝ
さゝのさゝりよくくとゝさゝりくゝ人のさゝり

あゝゝりとゝふこうたてれ柳むまを海をちゝ人を行くり
花ハちり面をくあゝるくゝあてれぐくまれなる
人をを行くれぢゝぢよハあゝとゝ我をあゝぢよハを
とゝふまゝりり

西行

三寄ふゝをとハあをとハ雪をそ俊頼をまを清をとハまとゝもむとゝんまゝや
をるハあゝるゝねゝとゝいを雪るを蓋をまれ家ふをを
きをゝこゝろぢのゝよハをれやうなれあをとハ雪をとゝふりて
ぢをゝんぢありゝもぢむとゝハ乃まゝをを迦ぢ玄妙乃行を
とゝをり

なりひゝの物語

むかしとゝ紀よゝん三年ふ

ゝゝんひとゝとゝ

よみ人しらず

紅葉

紅葉物とそふこゝろ樹をゝれてめ
ずらしきはあれとゝゝなる紅葉
さゝゝのうぐさりとゝ乃面れ
をりとゝゝハ初しもをあらかゝ樹もいさ富りてちるまでゝ乃んとゝふあ
をれでむ乃初しもふ者りてちるまハ乃
うハかゝ邪なり

紅葉ありとも

さゝゝゝゝふ春をふゝ濃てきんむのちるまんはのゝゝゝ
ちるまん花乃ちるゝ初しもふ後乃ゝゝゝふ樹をふ者れ
をふゝゝをあてこさるべきといふさゝゝゝゝ乃ゝゝねハ表
ちゝゝゝゝハむ田をちるゝ者れを樹ゝゝ花樹ゝゝ云
ゝゝ乃むゝゝゝゝ乃ゝ濃ゝて ゝゝゝゝ

人よりゝをゝゝゝ

ことはゝ

我宿乃むんゝゝふゝゝ人をちるまん後を惜ゝゝ
ゝゝのちゝねなどゝもといゝゝゝとゝゝゝゝ
はハゝしゝくゝゝゝゝとゝゝゝゝゝ花乃んゝ
ゝゝゝなゝ詠ゝ花乃散又濃淀秋風前ちゝ
いゝゝ

ゝゝ子院歌合の時ゝゝ

伊勢

乃ゝ人もゝ紅山里乃さゝゝゝゝのちるまん後をゝゝゝは
人ゝ繞をゝゝゝゝゝの樹ゝ邪のちるまん後ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ源氏ゝ花乃ゝの時ゝはゝゝゝ

さてゝ一本二本とあり。是を糸をよへまろんと